

仙台 文学館 ニュース



第五十号

エッセイ

あかまつの道を抜けて

第12回 —— 「春告げ鳥」

佐伯一麦

まだ寒気がまさっているものの、立春が間近となった日に、「あかまつの道」を歩いた。

陽当たりがよい斜面で、スズメよりもふたまわりほど大きな身体をした野鳥が、地面をびよんびよんと跳ね歩きをしているのを見かけた。数歩足早に歩いて立ち止まり、柔らかい土の部分をついばんでは幼虫やミミズを探しているらしい。

その可愛い姿と、背中の子茶色の羽毛と胸の黒い斑点模様を見て、思わず「ツグミ隊だ」というつぶやきとともに笑みがこぼれた。いつからか、ツグミを見かけると、戯れにそんなふうに言うようになった。

ツグミは、シベリアやモンゴルから秋に冬鳥として渡ってきた直後は林で群れているが、冬には群れは消失して一羽で見られることが多い。藪に姿を隠してしまつたツグミが、まだ伸びやかとはいえないが、キョロツ、キョロツと囀り始めているのを聞いて、そろそろふたたび群れとなつて渡去する準備をするのだろう、と想像した。

茂みに隠れて啼くツグミは、西洋では内気の特徴で、孤独な隠者にも擬せられる。しかし、春告げ鳥のうちでも最も美しい声を持ち、その囀りによつて人々に恋心を芽ばえさせるとされる。

デンマークのコペンハーゲンから車で北へ四十分ほど行ったところにある、ジャコメッティなど現代美術の蒐集で知られるルイジアナ近代美術館を初夏に訪れたときに、ツグミの仲間が全身が黒く、くちばしだけが黄色い、クロウタドリを内庭の芝生で見かけたことがある。やはり、ひょうきん跳ね歩きをしては地面の虫を探していた。

やがて、羽ばたいて行った先の木の枝にとまり、高く澄んだ美しい声で囀りだしたのを聴いて、あんな真つ黒な鳥が、よくもこんなによい声で啼けるものだ、と感心しながら、いつまでも続いて止まない声に耳を傾けたことだった。

ちなみに、クロウタドリの英名は、ビートルズの曲にもある「ブラックバード」。

(ささきかずみ 作家・仙台文学館館長)

※「あかまつの道」は、台原森林公園と仙台文学館をつなぐ散策路です。

CONTENTS

エッセイ
「あかまつの道を抜けて」佐伯一麦 ……1

シリーズ
「私の一冊」春風亭昇羊 ……2

特集
文学散歩のススメ ～明治篇～ ……4

予告
特別展
「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」 ……6

文学館日誌 ……8



写真：佐々木隆二



版画：明才

シリーズ「私の一冊」第44回

春風亭昇羊

町田康

『くっすん大黒』

転宅を済ませたあとすぐ取り壊された生家の一階と二階を繋ぐ階段の脇に置いてあった本棚には母親の所有している本が並んでおり、その大半が自己啓発本だった。中学受験を終え漠然と社会について考えるようになったある日、背表紙の「成功」という文言に惹かれ、一冊手に取って読んでみると、世界で活躍する一流の人間の思考が知れ、そのことで夢中になり、端から順に読み漁った。読めば自分も成功者になれる、と思った。ところが一通り読み終える

と、どの自己啓発本も書かれていることは割と当たり前のことというか、成功するためにはそのくらいの行いは当然するよなあ、というような内容ばかりで、啓発されたつ、と思えるような法則、発見が一切ないこと

前に脱いでほしかった。私はできるだけその後輩の素足を視界に入れぬよう心掛けながら会話をした。しかし意識するほど却って気になり、しかも後輩は土踏まずあたりをぼりぼり掻きむしったり、右手人差し指を足

に気付き、ということには社会に出て成功する才能素質が元々備わっているのだ、と自己陶醉して台所に行きポテトチップスをぼりぼり食った。

それは今でも忘れることのできない、夢中になった初めての読書体験だった。

しかしできることなら、夏目漱石であるとか、宮沢賢治であるとか、枚挙に暇がないが、そのような文学の香りに満ちた作家作品を読んだのが夢中になった初めての読書体験です、と言いたかった。だが実際に夢中になって読み漁ったのは自己啓発本で、なのに私は現在、成功も大金も掴めていない。読み込みが足りなかったのだろうか。悲しい。

そしてそんな日々の悲しみや暗澹たる思いを他者の中にも見出し、孤独感から抜け出すために今は文学を読むのだが、文学に興味を抱ききっかけとなったのが、町田康『くっすん大黒』だった。

落語家になる直前、バイト先の先

の小指と薬指の間に突っ込みこすつたりしている。その行為に野蛮な人間性を感じ、以後、距離を置こう、と思ったのだが、後輩はお構いなしにぼりぼり足を掻きながらぐんぐん話しかけてくる。嫌だ。鬱屈する。

輩平松さんが、ねえ星野君、というのは私の本名。ねえ星野君、これ面白いから読んでみなよ、と貸してくれた。読み進めるうちにひとり声を上げて笑っていた。衝撃だった。文学が面白いと感じた初めての経験だった。それから他の町田康作品は勿論、様々な作家作品を読んだ。

落語家になると、四年間の前座修業があり、修業中は大抵の前座が鬱屈した日々を過ごす。

自身が前座であることをわきまえ、己を押し殺し、先輩が白と言えれば白、黒と言えれば黒、逆らうことが許されない。中には、え、これ、白つか、どつちかってえと黒よりの灰色つていうか、少なくとも白じやないでしょ、ぶはは、ったく、冗談言うねえい、などと江戸弁交じりに反論する者もいる。境港育ちのくせに。だが、そういう前座も半年経つと、死んだ目で、アニサンノ、イウトおリデ、御ザイ。と唱え続ける機械と化してしまうのだから、おそろしい話である。

無論私も例に漏れず、日々暗澹たる思いであったのだが、どんな前座も、その修業から解放され二ツ目という身分に昇進した途端、目が輝きだす。心に明かりが灯りだす。抑圧された自己を解放し、自我を取り

またある会場では、楽屋の真裏に高座があり、音が筒抜けだったので、極力物音を立てぬよう細心の注意を払って過ごしていたところ、後輩が目の前で靴をがさごそ漁りだしたので、注意しようか逡巡している

り鉢巻きのごとく、ぐしやぐしやぐしや、と細長くねじりあげてそのままだま頭に巻きかねないのでさすがの私も小言をくらすと、後輩は半笑いですみませんと謝ったのだがその表情から反省の色は微塵も伺えず、腹が立つ。鬱屈する。

だが、文学作品を読むと、私よりも遥かに鬱屈した人間たちが人のかかわりあいの中で頭を抱え、悩み、無様な姿を曝け出している。愚かさを剥き出しにしている。そういった文学作品が光明となり、生きていくことができるのも、平松さんのおかげであり、『くっすん大黒』のおかげであり、町田さんのおかげ。



春風亭 昇羊
しゅんぶうていしやうよう

落語家。1991年、神奈川県横浜市出身。2012年、春風亭昇太に入門。2016年、二ツ目昇進。2023年（令和5年度）、2025年（令和7年度）ともにNHK 新人落語大賞ファイナリスト。2025年、第36回北とびあ若手落語家競演会奨励賞受賞。著書に『ひつじ旅～落語家欧州紀行～』（虹舎舎）がある。

2025年8月、仙台市内の魅知国定席花座にて、仙台文学館ゼミナール「井上ひさし作品を味わう」特別企画として、「春風亭昇羊落語会」（落語：井上ひさし作「質草」ほか、トークイベント：井上ひさしと落語）を開催した。



町田康
『くっすん大黒』
(2002年 文春文庫)

戻す。え、白つかか、これが？ いやいやいや、黒でしょ、どう見てもまあいいやそんなことより呑みましようつ、そういうえば昔アニサンに出すお茶をこぼして叱られたけど今となつたらいい思い出つす最高つすだははなどと豪放磊落に笑い飛ばして酒を呑む。

ところが私は前座修業を終えても心が暗れず未だに笑って酒が呑めない。という嘘になるが、心が暗れないのは本当。それは日々どうでもよいことを気にし、考えてしまうからで、例えば。寄席の楽屋で、後輩が来て早々、靴下を脱ぎ裸足になった。その後輩は二ツ目で、楽屋には私とその後輩しかいなかった。もう脱ぐのかよ、と思った。着替える直

文学散歩のススメ ～明治篇～

仙台市内には、文学ゆかりの地が数多く存在しています。今回はそのなかから、明治時代に仙台で活躍した文学者に関わる場所をピックアップしてご紹介します。暖かくなるこれからの時期、文学散歩に出かけ、往時に思いを馳せてみませんか？

1 瞑想の松

青葉区小松島4丁目 東北医科薬科大学敷地内（※大学キャンパス内からのルートは、入口が施設される時間があるのでご注意ください）

樹齢620年以上のクロマツの古木（仙台市の保存樹木に指定）。1887（明治20）年、第二高等中学校（のちの旧制二高）に入学し、在学中に「天才」と謳われた高山樗牛が、この松の木の下で思索にふけたとの逸話にちなみ、「瞑想の松」と呼ばれる。木の傍らには、先輩である樗牛を崇拝していた土井晩翠（詩人・英文学者）の歌碑が建つ。



瞑想の松（佐々木隆二撮影）



土井晩翠の歌碑
「いくたびかこゝに真昼の夢見たる高山樗牛冥想の松」
（佐々木隆二撮影）



◆高山樗牛
1871（明治4）年～1902（明治35）年 山形県生まれ。本名・斎藤林次郎。旧制二高から東京帝大に進み、在学中に匿名で応募した懸賞小説「滝口入道」が話題となる。雑誌『帝国文学』『太陽』で文芸評論家として活躍。

※東北医科薬科大学では、「瞑想の松」周辺緑地の景観・生態系を守るためのクラウドファンディング「『瞑想の森』再生プロジェクト」を実施しています（2026年4月30日まで）。詳しくは東北医科薬科大学のウェブサイトをご覧ください。



2 東北学院発祥の地

青葉区一番町2丁目 仙建ビル前

1886（明治19）年、キリスト教を伝道していた押川方義らが木町通に私塾を創設（のちの「仙台神学校」）。1891（明治24）年9月、この地に新校舎が建てられ、校名も「東北学院」と改められた。当時、赤レンガ造りの洋風建築の校舎は非常に珍しく、市民の注目を集めたという。この校舎で、のちに文学者となる岩野泡鳴、押川春浪らが学び、また、島崎藤村が教鞭をとった。



「東北学院発祥の地」碑



かつての東北学院校舎（東北学院史資料センター提供）

3 島崎藤村の下宿三浦屋跡

宮城野区名掛丁 名掛丁藤村広場

島崎藤村が東北学院の教師時代に下宿した「三浦屋」があった一帯。藤村は、1896（明治29）年12月頃から翌年7月に仙台を離れるまで三浦屋に住み、のちに詩集『若菜集』に収められる詩の多くを書いた。当時は荒浜の海の音がこまで聞こえてきたという。現在、この地は「名掛丁藤村広場」として整備され、詩碑も建てられている。



藤村広場（名掛丁東名会提供）



◆島崎藤村（藤村記念館提供）
1872（明治5）年～1943（昭和18）年 岐阜県生まれ。本名・春樹。1896（明治29）年、東北学院の教師として赴任し、約10か月間を仙台で過ごす。その後上京して文学の道に進み、詩集『若菜集』、小説『破戒』『夜明け前』などの作品を残した。

4 魯迅の下宿佐藤屋跡

青葉区米ヶ袋1丁目 米ヶ袋一丁目公園

中国の文豪・魯迅は、1904（明治37）年、仙台医学専門学校に入学。最初に下宿した「佐藤屋」がこの場所にあった。現在はその足跡を伝える公園として整備され、「魯迅故居跡」の石標が建てられている。魯迅が佐藤屋に下宿していた期間は2〜3か月で、その後は近くの土樋の下宿に転居した。



中国の詩人・郭沫若の筆による「魯迅故居跡」の碑



◆魯迅（仙台市博物館敷地内の胸像）
1881（明治14）年～1936（昭和11）年 中国・紹興生まれ。本名・周樹人。1904（明治37）年9月から約1年半、仙台医学専門学校に学ぶが、在学中に文学を志し退学。帰国後、『狂人日記』『阿Q正伝』などを発表。短編『藤野先生』には、仙台医専の恩師・藤野厳九郎の思い出が描かれている。東北大学には、魯迅が学んだ講義室（通称「階段教室」）が残されている。

◆岩野泡鳴

1873（明治6）年～1920（大正9）年 兵庫県生まれ。本名・美衛。1891（明治24）年、仙台神学校（東北学院）の教師になるべく来仙するが、試験を受け、学生として入学する。1893（明治26）年12月に上京し、その後作家として活躍。代表作に『耽溺』『毒薬を飲む女』など。



◆押川春浪

1876（明治9）年～1914（大正3）年 愛媛県生まれ。本名・方存。父は押川方義。東京の明治学院を経て東北学院に学ぶが、乱暴狼藉を働き放校処分となる。のちに文学を志し、1900（明治33）年、冒険小説『海底軍艦』で人気を得る。野球をはじめ、大のスポーツ好きとしても知られた。



5 日本聖公会仙台基督教会

青葉区国分町2丁目

1909（明治42）年、詩人・山村暮鳥が伝道師として赴任した教会。当時の建物は1945（昭和20）年の仙台空襲で焼失し、現在の建物は東日本大震災後に再建されたもの（場所は暮鳥がいた頃と変わっていない）。教会には、暮鳥の評論や説教の記録などが掲載された明治期の月報「あけぼの」が保存されている。



現在の日本聖公会仙台基督教会（佐々木隆二撮影）

◆山村暮鳥

1884（明治17）年～1924（大正13）年 群馬県生まれ。本名・木暮八十九。伝道師の傍ら、詩や童話を創作。約10か月の仙台滞在中、2冊のパンフレット詩集の発行、新聞詩壇の選、文学を志す地元の若者との交流など、旺盛な活動を展開した。著作に詩集『聖三後玻璃』『風は草木にささやいた』『雲』、童話集『ちるちる・みちる』など。



「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」

500年先まで残る本

現在私たちが手にしている本の多くは、明治時代に日本に普及した西洋の製本術をベースにしてつくられた「洋装本」です。しかし、西洋における伝統的な手づくりの製本装幀本について、日本ではあまり知られていないのが現状です。すべての工程を手作業で行う一点ものの本づくりには高い技術を要し、また1冊の本をつくるのに3か月から1年もの時間がかかりますが、たしかに技術によってつくられた本は頑丈で美しく、500年の保存がきくとされています。

本展では、ドイツに生まれ、晩年を宮城県気仙沼市で過ごした製本装幀家ティニ・ミウラのしごとを通して、その知られざる世界を紹介します。



『風の又三郎・宮澤賢治作品集』(製本装幀:2005年)



川端康成『古都』(製本装幀:2006年)

世界的な製本装幀家として知られるティニ・ミウラ(1940-2025)は、ドイツ北部のキール市で生まれ、ヨーロッパ各地で伝統的な製本装幀コンクールで数々の賞を獲得し注目され、伝統を継承した職人技と現代的デザイン感覚を融合させた芸術性の高い限定版特装本の装幀家として知られるようになります。1963年からはノーベル賞の賞状制作にも携わり、1965年に物理学賞を受賞した朝永振一郎、1968年に文学賞を受賞した川端康成の賞状も制作しました。

1971年、スイスで開催されたポール・ボネ賞コンクールで最優秀賞を受賞し、製本装幀の第一人者として国際的な評価を確立します。以降、図書館、美術館や博物館、愛書家などから依頼された稀覯本、愛蔵本の装幀のほか、イ

ギリスやスウェーデンの王室の公式文書の製本装幀も手がけてきました。また、歌手の谷村新司のデビュー25周年に際し、ティニが自選歌詞集の製本装幀を手がけたことも話題になりました。

1970年代にヨーロッパ留学中だった三浦永年と出会い、結婚。ヨーロッパ、アメリカ、東京に工房や教育組織を構えながら制作と後進の育成を行ってまいりましたが、2018年、パートナーである三浦の故郷宮城県に夫妻で「宮城芸術文化館」を設立し、ここを終の拠点と定め、2025年11月に亡くなる直前まで創作活動を続けました。

本展では、製本装幀家ティニ・ミウラが制作・デザインした革装本約70点を展示します。本がデジタル化に向かう今、長い歴史をもつ「製本」と「装幀」の視点から、知の容器として現実空間に存在してきた「本」の歴史、そしてその意義や魅力について、再考する機会となれば幸いです。



ジョン・ジェームズ・オーデュボンの超大型版鳥類図鑑『アメリカの鳥』The Birds of America(1827-1838年刊)複製版を、ティニ・ミウラがデザイン。(アベヴィル出版社・オーデュボン鳥類学会、1986年)



ティニ・ミウラが制作を手がけた川端康成のノーベル文学賞賞状(1968年制作、複製)
※作品はすべて宮城芸術文化館蔵

2、手製本ワークショップ

お持ちの文庫本を解体し、一点ものの上製本(ハードカバー)に仕立て直します。製本の入り口を体験するワークショップです。

日時:5月16日(土)
午前の部 9:30~12:30 午後の部 13:30~16:30
会場:2階 講習室
講師:mari(製本雨読/手製本作家)
定員:各回6名
対象:中学生以上
参加費:1500円
持ち物:文庫本を1冊ご持参ください。
申込方法:4月21日(火)締切(必着)

※申込が定員を超えた場合は抽選となります。
①ウェブから申込
②往復はがきで申込
【イベント名・参加希望回(午前の部・午後の部)・住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号】をご記入の上、仙台文学館にお送りください。(〒981-0902 仙台市青葉区北根2-7-1)

学芸員による展示解説

日時:5月17日(日)、5月27日(水)、6月20日(土)
いずれも13:30~ 申込不要・直接3階の企画展示室へ
※ご参加には特別展観覧券が必要です。



〈関連イベント〉 ※どちらも入場の際、特別展観覧券または観覧券の半券のご提示が必要です。

1、トークイベント

「ティニ・ミウラの製本装幀芸術の世界」

ティニ・ミウラのパートナーであり、マープル・ペーパーの制作者・蒐集家でもある三浦永年氏をお迎えし、西洋の製本装幀本について、そしてティニの製本装幀家としての生涯とその作品についてお話を伺います。

日時:4月25日(土)13:30~14:30(受付13:00~)
会場:2階 講習室
ゲスト:三浦永年(マープル・ペーパー制作者、蒐集家)
聞き手:三上満良(美術史研究者、元宮城県美術館副館長、本展アドバイザー)

定員:70名(先着)
申込方法:4月8日(水)10:00より受付開始
①ウェブから申込
②電話で申込(仙台文学館まで:022-271-3020)

【ウェブからの申込】
当館ウェブサイト内のリンクからお申込みください
<https://www.sendai-lit.jp/8259>

※いただいた個人情報は上記イベントのご連絡以外に使用しません。

特別展「美しい本 製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」

会期:2026年4月25日(土)~6月28日(日)
休館日:毎週月曜日(5月4日は開館)、
4月30日(木)、5月7日(木)、5月28日(木)、6月25日(木)
開館時間:9:00~17:00(展示室への入室は16:30まで)
観覧料:一般810円、高校生460円、小・中学生230円(各種割引あり)
主催:仙台文学館
特別協力:一般社団法人宮城芸術文化館、三浦永年 **企画協力:**三上満良



ティニ・ミウラ(1940-2025)

2025年8月～2026年2月



①小関俊夫さんは大崎市三本木在住の農民詩人。イベントでは、親交のあるシンガーソングライター、さとう宗幸さんも登場しました。



②宮田穂栄さんが編集者として関わった、松本清張や北杜夫についての思い出などを伺いました。



③内館牧子さんは、講座や展示など当館の催しにたびたび足を運び、エッセイにもお書きいただきました。



④佐々木隆二さんのユーモアあふれる語りで、写真にまつわる数々のエピソードが紹介されました。

1月	11日	新春ロビー展「100万人の年賀状展」オープン(2月11日まで)。
	24日	写真展「しゃんしごと人・佐々木隆二の世界」オープン(3月22日まで)。
2月	7日	第18回「仙台朗読祭」を開催。約20人の参加者が思い思いの朗読を披露した。ゲストの朗読家・渡辺祥子さんと詩人・和合亮一さんによる朗読も。
	8日	写真展関連イベント 対談「想いを撮る」を開催。出演は写真家・小岩勉さんと佐々木隆二さん。〈写真④〉
	11日	「歴ネットクイズラリー'25 プレミアム体験企画」として、学芸員による常設展示解説付きバックヤードツアーを実施。
	23日	仙台文学館友の会主催の写真展関連イベント「朗読のひととき～友の会会報「風と歩こう」欄に綴られたエッセイから～」を開催。

〈お知らせ〉
当館は2026年8月24日(月)から2028年4月末(予定)まで、建物の大規模改修工事のため全館休館となります。

8月	9日	仙台文学館ゼミナール「井上ひさし作品を味わう」特別企画として、「春風亭昇羊落語会」を開催(会場:魅知国定席花座)。
9月	7日	こども文学館えほんのひろば「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂へようこそ」会期終了。
	9日	外看板と館内のバナーを特別展「樋口一葉・その文学と生涯」に掛け替え。
10月	4日	特別展「樋口一葉・その文学と生涯」オープン(12月14日まで)。
	17日	特別展展示解説を実施(11月1日、12月11日にも実施)。
	19日	晩翠記念イベント 朗読・音楽・トークのひととき「農民詩人・小関俊夫 虫のために大豆をつくってる」を開催。〈写真①〉
	26日	特別展関連講座『『にがりえ』を読む』(講師:多田蔵人さん)を開催。
11月	3日	第66回「晩翠わかば賞・晩翠あおば賞」贈呈式を開催。
	9日	晩翠記念イベント『『荒城の月』を歌い継ぐ』を開催。声楽、フルート、ピアノによるミニコンサート。
	22日	特別展関連イベント 講演「樋口一葉・その魅力と現代性」(講師:小池昌代さん)を開催。
	24日	「佐伯一麦 北根ダイアログ2025 一宮田穂栄 ^{まりえ} さんを迎えて」を開催。〈写真②〉
	26日	年明けの新春ロビー展「100万人の年賀状展」関連イベントとして、「絵手紙教室」を開催。
	30日	特別展関連講座『『たけくらべ』を読む』(講師:笹尾佳代さん)を開催。
12月	7日	特別展関連イベント「朗読と解説『一葉の日記』」を開催(朗読:渡辺祥子さん、解説:当館副館長 赤間亜生)。
	14日	特別展「樋口一葉・その文学と生涯」会期終了。
	16日	外看板と館内のバナーを写真展「しゃんしごと人・佐々木隆二の世界」に掛け替え。
12月	19日	1階に伝統門松を設置(2月11日まで)。
	27日	2階情報コーナーに、17日に逝去された脚本家・内館牧子さんの追悼コーナーを設置。〈写真③〉



交通のご案内

■バス利用の場合

(宮城交通バス)

- 仙台駅西口バスプール2・3・4・6番乗り場 仙台北・泉地区方面行 (北山トンネル経由を除く)

(市営バス)

- 仙台駅西口バスプール6番乗り場 八乙女駅行
- ※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

- 地下鉄南北線「台原駅」下車、南1番出口より徒歩約25分(台原森林公園内あかまつの道経由)
- ※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台(無料)

- 台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。



カフェ ひさしの杜

お食事、デザート、各種飲み物などをご用意しています。お得なランチメニューもあります♪

【営業時間】
10:00～16:00(フードラストオーダー15:30)
※ランチは10:00～14:00
TEL 022-219-1341

